

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

崑崙山脈「阿克沙衣峰」(6770m未踏)偵察行 その9

新沙漠公路を横断 2

12:30 紅山服務区という記載のある食堂で一服。西の方にうすぼんやりと小高い丘が見える。ヌルさんによれば「マザーターグ」とのこと。ヘディンがさまよい、なかなか見つけられなかったその山を今砂塵の彼方に見ているのだ。行きたいという衝動に駆られたので、ヌルさんに聞いてみると、距離はここから8kmほどだが、今年はホータン河の水量が多くて渡れないので行けないということだった。ここでもまた水に阻まれた。13:30ころ、わずか1kmくらいの間だったが車窓の風景が変わった。ここは沙漠のど真ん中のはずだが、突然池があちこちに出現したのである。14:00にはホータン地区を抜け地域的にはアクス地区へと入った。トイレ休憩のとき、近くにあった胡楊に近寄って見るとさすが過酷な条件を生き残るだけのことはある。葉は非常に肉厚で、一枚一枚に水を蓄えているのが分かった。



タリムの大川にかかる大橋

アラール（阿拉尔）の料金所を過ぎ（どこからどこまでかはわからないがこの道路は有料道路だった）、暫く進むと「阿拉尔塔里木河大橋」を渡った。「タリム（塔里木）河」・・・この大河は、さまよえる湖ロプノールとともに西域情緒をいや増しに増す。しかし、この河がこれほどの文字通りの大河であるとは想像もつかなかった。川幅は一体どのくらいあるのだろう。天山でも崑崙でも降水量が多かった今年は特に水量が多いとはいいますが、その川の幅をすべて埋め尽くして茶色く濁った水は

滔々と流れていく。この大橋は2009年9月に完成したばかりという。橋のたもとに看板には、この橋の全長が6158mと書かれていた。そして総工事費は1億5000万元、日本円にすれば22億5000万円の大作である。

16:30 アラールの市街で遅い昼食を摂る。「アラール」、聞いたことのない名前だが、ヌルさんによれば、できたばかりの市だということだった。このあたりは実はタリム河支流の水郷地帯のような場所で、結構水にも恵まれた場所なのだが、もともと人は住んでいなかったらしい。1999年に購入した新疆の地図を見るとこのあたりは、10団場とか12団場といった記述があるだけで、どこにも「阿拉尔」という名前は見られない。団場というのはいわゆる屯田兵の村のことだそうだが、漢族の部隊が入植し、開拓。その後帰農し、家族や親戚を呼び寄せることで村が町へと発展し、やがて市となったのだそうだ。まだできたばかりという市庁舎を通り過ぎるときにヌルさんが「漢族の町だ」と吐き捨てるようにつぶやいたが、まさに漢族の新疆への進出の最たる例だ。

この沙漠の中に新しくできた町の郊外に今日はテントを張ることにした。人々が涼を求めて水遊びをしている細い川をしばらくさかのぼったところを今宵の宿と定めたが、まだ日は高く暑い。そんな中、太公望の二人は早速釣りの準備を始めた。サービス精神旺盛な彼らは、僕らのための釣り竿まで用意して、やってみろという。実は小生、社会



人になりたてのころ、少しやったことはあるが、釣りの嗜みはなく、ほぼ初体験といっても過言ではない。やがて日暮れ近くなって、秦さんが次々と鮒をあげはじめた。その肉を餌に大物狙いのリールも仕掛けた。初体験の僕もなんと鮒を釣ることができた。続いて久根さんも。コックのヌルさんが夕食準備に忙殺されているまさにそのとき、大物

がかかった。なんと体長50cmを越そうかという鯰。ひげも立派である。秦さんが早速鮒と鯰の煮込み料理を作ってくれ、食卓は賑やかになった。

標高1000mのアラールは夜になればそれなりに涼しかったが、昼間の日射で暖められた沙漠の砂は夜になっても容易には冷えない。寝られないと言うほどではなかったが、テントの下は夜通し熱を持っていた。夜半、外に出てみると満天の星。天の川さえ

見まがうほどの星の数。ヘッドランプの明かりの先をここでも細かい砂が流れていく。本当はもっと沙漠の真ん中での幕営を望んだのだが……。それでも十分に気分は味わえた。太公望の二人は夜釣り、そして朝も早くから釣り糸を垂れていたが、二匹目の大物はかからなかった。きっと昨日連れた鯰が主だったのだろう。

タリム河支流で泳ぐ

8月4日 朝食として最後のヌルさんの料理に舌鼓。ヌルさんは主食の他に野菜を中心に少しずつパターンを変えた2品の料理を作ってくれる。11:00にテントを撤収してクチャに向けて出発。昨日が417km、今日は200kmの行程だ。12:15、サヤ(沙雅)大橋で再びタリム河を渡る。胡楊がうっそうと茂っている林、あるいは寿命を全うした胡楊が立ち枯れしている一帯、ピンクの花を咲かせたタマリスク(紅柳)の藪。刻々と移りゆく沙漠の周辺の豊かな自然を眺めながらのドライブである。と、突然公安の検問があった。秦さんによればスピード違反の取り締まりだという。その取り締まり方法というのはこうだ。2地点間の通過時刻を記録することにより、平均でスピード違反であればつかまるといふ。現実にはここから70km先の地点を1時間30分以内で通過すると罰金を払うことになるという。なんとまあおらかな方法。秦さんは沙漠をこれまでそれなりのスピードで飛ばしてきたが、悪びれる風もない。暫く行って、タリム河の支流の川のほとりに車を停めた。今日はクチャまで行ければいいので、急ぐこともない。「釣りをしよう」というのだ。昨日の鯰で弾みがついてしまった秦、周の二人は、スピード違反回避の目的とも相俟って早速釣り糸を垂れた。すると、釣りに興味のないヌルさんは、パンツ一丁になって川に飛び込んだ。「気持ちいいですよ。大西さんもどうですか？」沙漠の幕営の翌日のこと、一も二もなく僕も川に飛び込んだ。蚊に刺されたと早々に釣りを諦めてきた久根、周の両氏も交え、沙漠に出現したプールにしばし、歓声が響いた。

昨日今日と、沙漠を旅して思ったことは、こんな体験を高校生がしたら世界観が変わるだろうなあということ。実現したら楽しいと夢は広がっていく。ただし、もし高校生を連れてくるとしても、男女を問わずどこでも用足しができること、胃腸が強いこと、何でも食えること、は最低条件だろう。と思った。もちろんその前に新疆情勢が落ち着くことが前提条件である、

